誰もが憧れる酪農の実現のために

北海道名寄産業高等学校 酪農科学科　3年　戸澤 慧

目の前に広がるオホーツク海、なだらかな傾斜の採草地、夏でも平均気温が19度と比較的涼しい枝幸町。私の家はここで、耕地面積88ヘクタール、搾乳牛90頭、育成牛40頭を飼育している酪農家である。

私は、幼い頃から牛やトラクターや農作業機にとても興味があり、いつも両親にくっついて歩いていた。小学2年の頃、周囲の離農により家の採草面積が増え、牧草時期に忙しそうな両親を私は見て、「僕にもできることはないだろうか。」と考えるようになった。小学生の頃の仕事は、育成牛の除糞をすること。小柄な私には育成牛でもとても大きく見え、恐怖心でいっぱいだった。寝わらを敷いて作業が終わった時、とてつもない疲労感と同時に今までに感じたことのない達成感を感じた。

小学3年のある日、「そろそろ牛の頭数を増やし、乳量を上げよう」という父と母の会話を耳にした。その後、新しい牛舎の建設が始まり、平成17年2月17日、対尻ニューヨークタイストール式80頭牛舎が完成した。給餌の手間と時間を省くため自動給餌機を導入したので、大幅な作業時間の短縮に成功した。中学校3年の夏、父は私に「お前は家を継ぎたいか?」と聞いてきた。幼い頃から牛やトラクターが大好きで、仕事をしている両親の姿がカッコイイと思っていた私は即座に「うん!」と答えた。返事をした後の父の笑顔はとてもうれしそうに私は見えた。そして、この時から家を継ぐために意思を持って酪農について考えるようになった。その頃は、単純に「牛が喜ぶ事をすれば、良い」と考えていて、哺乳の時のミルクや配合飼料などを少し多めに給与していた。また、ブラッシングは、牛に蹴られることもあるが、牛が催促するので、暇を見つけては行っていた。しかし、その後、私は名寄産業高校に進学し、授業を受ける中で、牛にとって何が必要なことなのかを学んだ。

高校には、私と同じように家を継ごうと志している同級生や実家は農家ではないけれど、農業に興味があるといった同級生が多くいる。クラスで自分の家の牛舎や牛や仕事の内容などを話し合い、授業では、私はとても楽しくなる。今までに聞いたことのない体験談を聞くたびに、自分はまだまだ知らないことばかりで恥ずかしく、もっと知りたい好奇心が湧いてくる。そこで、私は多くの人から話を聞くようにしている。話しの中に、将来の経営のヒントとなるものがあるかもしれない。そして担任の先生から、世間や社会を知るために、進学を勧められた。そこで、進学できるように資格取得や部活動や農業クラブ活動、そして、日々の学習も努力している。実習作業では、質の向上にも努力している。ただ早く終わらせるのではなく、きれいに、周りを見ながら作業をする。これにより、仕事の要領が身につき、同じ仕事なら、より短時間でこなすことができるようになる。

農業後継者になるにあたって、酪農の繁栄の道筋を考えた。まずは、酪農が商業的に儲かる職業である必要がある。それには、需要を多くする取組みが必要であり、酪農のイメージをもっと高めていく必要があると考えている。そこで、高校に入学してから、畜産、食品製造、環境科学、農業基礎などの様々な授業を通して、みんなが憧れる酪農の実現について考えて、実践してきた。

私は、この仕事が好きなので、牛が草を食べて横になって寝ているだけでも面白く、牛乳のおいしさを人一倍感じるが、一般の人にも酪農の楽しさや奥深さを、どのように伝えるかが問題である。

広報プラン１　牛の生態ですが、牛は4つの胃を持っており、ルーメンという発酵タンクを持っているので、北海道の冬の寒さでも外で生活できる。また、放牧時期に青草を腹一杯食べると、いつもは夢中になって食べる配合飼料をやっても食べない。それほど、牛は草が好きなのです。さらに、最初から慣せば熊笹を食べ、脂肪の高いミルクを出す。

広報プラン２　牛乳は、低温殺菌の方が、牛乳本来の味が残っていて、特に子供には違いがわかる。例えば、鶏卵を美味しく見せるように餌にカロテンを利用するように、青草に含まれるカロテンが牛乳中にも移行するため、放牧牛の牛乳は黄色っぽくなる。また、牛が夜間にリラックスした状態にメラトニンが多く含んだ牛乳を出すのを利用し、ナイトミルクという商品化もされている。

広報プラン３　加工品といえば、原料に付加価値がついて利益を大幅に生むので、今後は特に重要である。有名なものでは、新得のミルクジャム、各地のアイスクリームがあるが、豚骨に対抗して、牛骨スープ、生キャラメルに更に生クリームを加えて、生キャラメルクリームも良いと考える。全国を見ると、生クリームにアズキやチーズやカスタードなどを合わせた商品がヒットしている。自家製クリームのアレンジを発信して、各家庭で生クリームを消費してくれれば、牛乳の消費拡大に繋がる。いかに、一般家庭で乳製品を利用する取組みを浸透できるかがカギになる。

広報プラン４　酪農風景の配信は、朝日、夕日、季節、日常の出来事などをブログで行い、内容を充実させることでファンを増やす。食品は、味以外の環境に大きく影響されるものなので、おいしい空気、おいしい水、快適な気候などからできている他には真似のできないことをアピールする必要がある。

広報プラン５　自給率の開示は、日本や北海道の自給率に加えて、自家で生産している酪農生産物だけでなく、自家菜園で栽培しているものを合計して、戸澤家の自給率を配信する。そこで、酪農業が、いかに食糧に対して安心かをアピールする。人間の生活には、衣食住が大切だが、その中でも、重視するのは食であり、食の安全が確保されて初めて生活が安定する。このことを、電気の自家発電メータのように、自給率メータという概念を

認知させる必要がある。

これらの情報を、個人ではなく、各地域の青年部で発信していくことで、興味や理解が深まり、やがて需要につながっていくと考える。

さらに、経営基盤の牛に対しても、もっと牛の生理を考えて、健康に飼育する必要がある。私には以前から考えていたプランがある。それは、飼育者の人間側だけでなく、牛の立場から物を考えていくこと。例えると、カウコンフォートに近いものである。牛は、人間の言葉はしゃべれないので、私が、いつも観察して理解して対応していく必要がある。

飼育プラン１は、家で栽培されていないデントコーンやアルファルファ混播サイレージなどを作り、粗飼料の自給率を向上させていきたい。これは、輸入飼料の価格に左右されないだけでなく、反芻動物として、粗飼料で牛を飼育することで、健康で長生きにもつながる。

飼育プラン２は、人間にもメタボリックがあるように、牛にもボディーコンディションがある。しっかりと確認してスコアをつけることで、飼料の無駄と牛の体調をコントロールができる。

飼育プラン３は、牛の体の仕組みを理解して健康にすることが重要である。牛乳1リットル生産するには400リットルの血液の循環が必要である。健康でなければ、当然、生産量も落ちる。また、飼料給与の順番や種類を変えるだけで、牛乳の乳量は変化する。ルーメンの仕組みを理解して、牛が健康になる方法を確立したい。

私は、この情報化社会にありながら、社会に向けての酪農の認知が、まだまだ不足していると考える。また、酪農家自身も日常の多忙な毎日で、仕事一辺倒になっている。今回提案した広報プランと飼育プランを、できることから実践して完結させていきたい。実現のために、私と家族、地域の仲間や全国の同志、そして、我が家を支える優秀な牛達と、がっちりとスクラムを組んで、枝幸町にユートピアを築きたい。